

Title	桃の民俗誌
Author(s)	王, 秀文
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/46590
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	王 秀 文
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19872 号
学位授与年月日	平成17年12月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	桃の民俗誌
論文審査委員	(主査) 教授 川村 邦光
	(副査) 教授 杉原 達 助教授 富山 一郎 天理大学文学部教授 飯島 吉晴

論文内容の要旨

本論文は、桃をめぐる民間伝承や民間信仰、民間の習俗に関する民俗学的研究であり、また日本や中国、朝鮮を中心として、桃に関連する民俗や神話を分析し考察した比較民俗学および比較神話学の研究でもある。「序説」では、先行研究における桃に関する諸説が個別的で断片的であり、一貫し統合した解釈がないことを指摘し、日本と中国を同時に視野に収めたマクロな研究を目指し、桃に関する民間の伝承・信仰・習俗を分析して、その根底に秘められている一貫したシンボリズム、その根本的な成因や文化的・社会的背景の究明を目的とすると本論文の課題が設定されている。

第1章「桃の植物文化誌」では、桃の植物としての特性や原生地、伝播と分布、食用・薬用・鑑賞用としての桃の利用史について述べ、桃の強い生命力と多果性という植物としての特性は、桃が食用や薬用、鑑賞用として、深く生活の中に入り込み、人びとに豊かな想像力を働かせて、様々な民間信仰を生み出す基盤となったことが指摘されている。第2章「伝承の一—桃の生命力」では、『詩経』の「桃夭」などの歌謡や三月上巳の祭祀を記した古典を分析し、桃が女性の成熟のシンボルとして用いられていたことを指摘する。三月上巳の祭は日本に罪穢れを祓う儀礼として導入され、桃の節供と呼ばれ、女子の雛祭りとして定着していった。ついで昔話「桃太郎」を検討し、桃が女性の旺盛な生殖力を表象していると指摘する。中国には桃が子供に変わる話があり、生命力の旺盛な仙果とされ、神話や民間伝承で若返りや不老長寿の仙果となっていることを指摘し、「桃太郎」の話が中国の仙果思想の影響を受けたことを明らかにしている。第3章「伝承の二—桃の呪力」では、記紀神話の黄泉国訪問譚で黄泉軍を追い払った大樹の桃の実のもつ、邪気を退散させる辟邪の力が探られ、それが中国から伝わった追儺の儀式と関連づけられている。邪気や邪鬼を防ぐ桃の霊力は、桃の大樹のある「度朔山」「桃都山」伝説の分析を通して、桃符・桃板、後の春聯といった門飾り、また鬼門を守護する門神の習俗や信仰において伝承されていることが検討され、桃の呪力の源泉が度朔山・桃都山の陰陽の分水嶺にある仙木である桃の大樹にあることが指摘されている。そして、再び「桃太郎」が検討される。前半の桃太郎の異常誕生譚と後半の鬼が島征伐の英雄譚とは別個の話であり、両者を合成したものとする見解を批判する。桃のもつ仙果・仙薬としての強い生命力と邪気や邪鬼を防ぐ霊力の伝承や信仰が異常誕生譚と英雄譚とを結びつけていることを明らかにしている。第4章「伝承の三—桃と別世界」では、道教の神仙説から、不老不死の仙境である蓬莱山・崑崙山、また不死の薬と術をもつ崑崙山の西王母と桃との神話的な関連性が辿られ、こうした楽園としての仙界が陶淵明の『桃花源記』に描かれた桃源郷・理想郷へと文学的に結晶されていったことが考察されて

いる。第5章「世界における桃の伝承」では、日本・中国以外に桃の伝承や祭祀の見られる地として、朝鮮が取り上げられ、主に巫俗信仰において、桃が不老長寿のシンボルとなっているとともに、西王母の神話と関連した伝説、日中と類似した民間伝承や習俗が見られることが指摘されている。終章「桃のシンボリズム」では、これまでの全体をまとめ、桃がシンボリックに陰と陽、生と死、俗界と仙界の境界に位置づけられ、女性の生殖力・生命力と結びつけられて神聖化され、民間伝承や習俗、祭祀において女性の表象となるシンボリズムを担い発展させてきたと結ばれる。

論文審査の結果の要旨

本論文で、まず第1に特筆すべきは、本書の「跋」で中野美代子が述べているように、桃の民俗に関して網羅的かつ体系的に研究した最初の専門的な著作であるということができる。桃にまつわる伝承や神話、伝説、儀礼、文学などを中国や日本の古典を含めた、多くの書物を渉猟し、その膨大な文献に埋もれることなく、見事に整理して説き明かしていることである。桃というひとつの果実、あるいは樹木に限定されたものだが、その歴史的・文化的な位相はきわめて多様で広範であるとともに、深層に及んでいることを、本論文からたやすく推察することができよう。今後、桃のみならず、植物に関する伝承研究や神話学研究、儀礼研究においては、基本的な文献として参照されることになるものと考えられる。第2に、本論文においては、初めから日中文化の比較民俗学的研究が一貫して志向されており、それが徹底して推し進められることによって、一国的な民俗研究に止まらない、着実な成果があげられていることを評価できる。比較研究では、たんなる類似性を取り上げて、民俗や文化の同質性、また文化の伝播経路や影響関係を安易に指摘して事足りるとする研究が多かったが、本論文はそのような比較研究とは異なり無縁である。たとえば、桃に関わる民俗儀礼を論じる際には、文献を精査し、日中民俗儀礼の異同を明確に浮き彫りにして、各々の発展形態を的確に指摘している点は大いに評価できよう。第3に、本論文では、桃のシンボリズムを探究することを、一貫した方法論的なテーマとしていることが評価すべき点であると考えられる。博覧強記に膨大な文献を読みこなすことによって、網羅的に羅列したたんなるモノグラフに終始することなく、歴史的な変遷も射程に入れながら、シンボリズムの探究に的を絞って分析し考察していることは、本論文の大きな特徴であり、評価に値しよう。

本論文では、桃のシンボリズムの分析において、桃の大樹が陰と陽、生と死、俗界と仙界の境界に位置づけられるとするが、「桃の力」と境界性に関する考察が不十分である。「桃の力」が女性の生殖力・生命力と結びつけられるなら、女は陰、男は陽とする二項対立的な世界観、また神話的モチーフがあり、西王母のような女神崇拝に見られる男性中心の神話的世界観が確立されていよう。また、「桃の力」が陰や死に対抗する力をもつとするなら、二項対立的世界を流動化させる力、解体・再生させる力をもつとも解釈できる。「桃の力」の境界性や重層性をジェンダー論的な視点によって解釈し、より深い考察をする作業が課題として残されている。しかし、こうした残された課題は、もとより本論文の達成した成果を損なうものではなく、むしろ今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。